

＜厚生省相模研修研究センターの相模教員養成課程での「認識論」の講義を担当＞



銭形科学観のこと

庄 司 和 晃

認識論での、おつきあいでした。
なつかしく思っています。

わたしが、この科目のもと、「認識の三段階連関理論」を講義したのは、昭和53年度からでした。
終わったのは、平成13年度ですから、つごう23年間になります。

思えば、この間に、わたしの認識論も、かたまっていきました。

それは、認識序論（哲学・分類・用途）、認識原理（構造・発展・のぼりおり）、認識三論（科学・コトワザ・宗教）、認識各論（一生認識論・規範的認識・精神づくり論）、のかたちで、体系化されていったのです。

講義の運営では、抽象論議にならぬように、具体例のくめんに、力を注ぎました。

あの銭形平次の話も、その一つです。主題歌のポイントは、こうでした。

- (1) 男だったら一つにかける
かけてもつれた謎をとく……（科学論）
- (2) やばな十手はみせたくないが
みせてききたいこともある…（象徴論）
- (3) 道はときには曲がりもするが
曲げちゃならない人の道……（規範論）

それを、かっこの中のごとく、解釈しつつ、認識論を展開していったわけです。

そうこうしているうちに、主題歌のオルゴールカード、実物の十手、人の道を託した各種の手拭も
見つかり、中身のしだいも豊富になっていきました。

そして、真理といわれるものは、日常のそちごちに、発見し得ることを学んでもらったのでした。

右の、いわゆる銭形科学観は、磁石の引力・まさつ力・滑車と仕事量などの、謎ときの体験学習
も加味されて、その充実がはかられていきました。

科学的認識は「実験」によってのみ成立することを明らかにしていったわけです。

これと対極にあるのが、宗教です。宗教的認識は「信仰」によってのみ成立する、ということでした。

ここへの一面的なタッチとしては、宗教や呪術の発生論に着目しました。

そのために、火打ち石と火打ち金とをぶつけて火花をちらす、切り火の体験を、各人にやってみ
たわけです。

その火花が、オオカミよけにもなり、ひいては厄病よけや魔よけにもなっていく、すなわち争めの
思想的行為の誕生です。ここのごとは、獅子頭の舞やシーサー信仰ともからめて、話として、まとめ
てみました。

そういったことです。

思い出のよすがになれば、と思います。

人生は長いです。

先行きの幸をお祈りいたします。

(大東文化大学名誉教授)

ク・2618・6 (10回・30時間)
以下、「千世茶香教」と略称する

—このあとは、またの機会だ。